

第16分科会「里山と田んぼ」

勉強会「里山と田んぼと食と農とこれから」

日時：2006年6月3日（土）18:00～21:00

場所：佐倉市ミレニアム佐倉

参加者：32名

趣旨

「里山と田んぼ」分科会では本年度、「里山とゴミ」というテーマを根底に据え、それぞれの分野で第一線でご活躍の皆様にお集まりを頂き、「里山と田んぼと食と農とこれから」と田んぼをキーワードとし、お話しを伺うことを目的の“勉強会”を開催させていただきたく事としました。

総合司会：相馬由起子（「里山と田んぼ」分科会代表）主旨説明：荒尾稔（里山シンポジウム実行委員会事務局長）



「ふゆみずたんぼの現状とこれから：伊豆沼温泉反対運動」

呉地正行（日本雁を保護する会会長）

神奈川県生まれ。東北大学工学部卒業。現在、宮城県若柳町在住。日本へ渡来する雁の保護運動に携わり、宮城県の伊豆沼や蕪栗沼では、地元田尻町や国、地域住民等を介して市民参画型の自然再生運動や地域起こしを实践。特に、最近の循環型農業や生物多様性保全の水田の新たな展開として注目される「ふゆみずたんぼ（冬期湛水水田）」の取り組みにはその発端を開いた一人。さらに里山・田んぼを自然を体感する場、また親子がふれあう場としての視点で教育的活動にも携わる。最近は地元「伊豆沼環境破壊温泉掘削反対」運動を精力的に展開中です。



「食があぶない！ スローフードの現状とこれから」

金丸弘美（作家・食環境ジャーナリスト）

1952年佐賀県唐津市生まれ。食環境ジャーナリスト。一線の編集者とライターとの交流会ライターズネットワーク相談役。日本ペンクラブ環境委員。オリザジャポニカクラブ代表。大分県食育アドバイザー。鹿児島県あまみ長寿子宝プロジェクト推進委員。雑誌・新聞などのエッセイ、ルポ、映画紹介、企画・編集プロデュース。プロモーションアドバイザーなどでがける。テレビ、ラジオなどにも多数出演。最近のテーマは、農業、食材、環境問題、地域活性化、高齢者の生きがい、それに以前から追いかけてきた映画。とくに農業、食材に関してはここ15年で北海道から沖縄まで全国の町や農村500ヶ所、東京の農家や野菜売り場60ヶ所を自ら巡る。食に関する執筆を続け、現在も全国を巡っている。著書『本物を伝える日本のスローフード』『ゆらしい島のスローライフ』他多数。2006年食育をテーマに『子どもに伝えたい本物の食』、『フードクライシス 食が危ない！』を出版。多くのメディアで取り上げられている。子どもの誕生をきっかけに食の安全を考え出した。自然の暮らし、スローライフを実現するため2001年に徳之島に移住。



「千葉県小見川町ローハス・ホビー村」立上げ計画」

白石嘉宏（NPO 法人ソフトインダストリー代表理事）

昭和17年2月2日生まれ、昭和40年学習院大学経済学部卒業。得意な分野、市場動向／観光施設計画／観光情報／イベント／観光計画／宿泊産業／福祉関係／健康増進施設／農村地域の活性化計画／少子高齢者社会のライフスタイルの調査・企画立案・計画など。昭和40年台糖ファイザー株式会社に入社、その後ジャパンタイムシェアリングシステム株式会社を経て、昭和47年(財)余暇開発センター入所。国際部長、情報研究部長など、新規分野を歴任、関東農政局の「都市と農村を結ぶ交流研究会座長」など。平成11年同センター退職。最終役職は「研究開発部、研究主幹」。大学では川村学園女子大学で8年、成安造形大学で3年、非常勤講師を務める。

「田んぼの生き物調査現場から見る千葉の農業」

渡邊英二（千葉県県立茂原茂原樟陽高校教諭）

千葉県茂原市生まれ、高校の部活動の一環で「農業土木部」を結成し、顧問として奔走する。2003年より、農業土木部の生徒たち、明るい里山づくりを目指す地権者とも協力し、30年以上放棄されていた谷津田の復活に取り組んでいる。

生きものの生息場所の復元を念頭に、谷津田の水田・農道・水路・ため池等を復元・創出している。また、水田での稲作、生きもの調査、測量等を実施している。昨年より、千葉県栄町の農業者団体と協力し、田んぼの生きもの調査に取り組み、冬期湛水水田とイトミミズに出会う。現在、谷津田で冬期湛水を実践している。



「食と農と里山、現状とこれから」

金親博榮（里山シンポジウム実行委員会会長）

1990年4月に谷当グリーンクラブを中心とする「谷当版グリーンツーリズム」を設立。活動は千葉市の内陸部東縁部に位置する、住宅団地に隣接する36世帯の農村集落「谷当（やとう）町」を中心とした、田、畑と里山・山林に加え、住宅、加工場を活動の場としている。いずれも、たくさん残っている昔ながらの里山の美しい農村環境を活用し、都市住民と農村との交流を通じて、安らぎと、活性化を、徐々にではあるが、現実の物として来た。活動は大別し、3部門から成る。①アウトドア同好会「谷当グリーンクラブ」、②地元原料の食品加工料理教室及びレストラン「わたしの田舎 谷当工房」、③カルチャークラブ Artistic Space "Kaneoya"。利用者の60%は千葉市内在住、他は県内だが、東京、神奈川からのリピーターもいる。農業、林業家が、里山で生計を立てることができるようになる途、地域の活性化、模索中。農林業の生産物の生産流通。観光資源、環境資源としての、土地、景観、文化の再評価、開発。都市住民との交流を行っている。



「桜宮自然公園の成立と現状とこれから」

所 英亮（桜宮自然公園をつくる会会長）

千葉県多古町に生まれ、現在、多古町にあつて「桜宮自然公園をつくる会」会長。農事組合人の役員として、朝市、野菜の結合セット、学校給食、市民農園「私の田んぼ」、都市との交流の場「グリーンファーム」などを実践してきました。

30年にわたって香取郡多古町の農業委員を勤め、念願の里山保全活動に、平成13年11月から地域の人たちとともに「桜宮自然公園をつくる会」を結成し、住民の憩いの場にしようと里山活動をしながら、不法投棄も監視することが出来る、年間活動型の運動として、現在にいたっている。



コメント「多様性と連続性の里やま田んぼを目指して」 中村俊彦（千葉県立中央博物館副館長）

皆さんの指摘した、いけないもの・まずいものを取り出してみると、「乾田」、「ファーストフード」、「資本主義」、「コンクリート水路」、「灌漑ポンプ」、「産廃」といろいろであった。「産廃」を除いて、良いと思ったら、実際は長続きせず悪かった。食も農も田んぼも人も、いま原点に戻ることが必要な時期にきたのではないか。人は自然の一員として、里やまをつくり、その中で自然の恵みを得ながら生きてきた。この自然との付き合いの基本は、「多様性」と「連続性」であり、今まさに、生態系とともに、人々の連続性・多様性が求められている。

まとめ

かつてきわめて豊かな生活が保証された千葉県、この千葉の広大な里山の再生には、NPOや市民、行政の力だけではなく、地域の地権者の方々の力が最も大事。地域で生活出来る場の再構築には、農家の方々をはじめ土地改良区、農協等がみんなで地域再構築へ立ち向かうこと以外に無く、その為には、農家が主役となって、谷津田の保全とともに乾田化した田んぼ、3面切りされた用水路等の対策を考えていただき、その支援としてNPOや市民、行政、そして大学・博物館等の研究者が力を合わせていく仕組みが必要である。